月

和漢詩草 一

山崎

昭和十五年六月十日購入

若葉の頃 村上

明月

文學 都隨筆類
7 號
山崎藏書
昭35年6月3日購
通卷 號

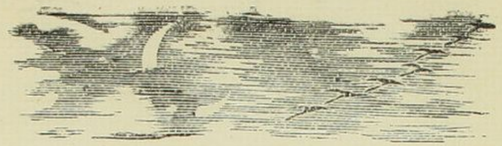
東山を輾り出づる新月は人皆之を弄す西海に浴する殘月は人の之を看る鮮し均しくこれ月なり

而も尙ほ此の如し題して殘月と云ふ亦意を茲に取る所ありあゝ著者が世に容れざるが如く斯書も亦た世に容れられざるへきは疑を用ゐざる所なり況むや文字は著者の本職にあらざるをや刊成るの日一言以て斯書の前途を吊す、京都國民學校にて　著者

I wait thy coming, love-
repose veils not mine eyes-
far in the night.

I wait the moon till night
the close, of her celestial
path of light.

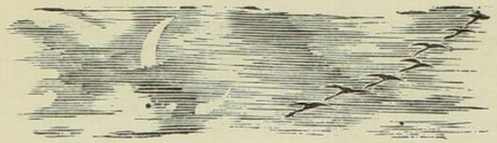
罷釣歸來不繫船江
村月落正堪眠縱然
一夜風吹去只在蘆
花淺水邊（司空曙）



殘月

目次

殘る月（詩）……一
懷春賦（詩）……二
花のいろ〳〵……八
にくや春雨（詩）……一〇
嵐峽春懷……一一
須磨春懷……一二
幽囚（詩）……一二
花賣……一六



春かたみ(詩)……一八
嵐山物語……一九
北海たより……二三
君らさ歌へ(詩)……二四
夏の調度……二六
近畿の夏……二八
十把一束(句)……三一
あれも人の子(詩)……三二
水車(詩)……三三

この袖(詩)……三四
今日水尙寒(詩)……三五
天地玄黄(詩)……三六
人生自古孰無死……三八
哨兵線(詩)……四一
亡友を吊ふ(詩)……四二
消えぬ思(詩)……四三
今日此頃……四六
撃鼓(詩)……六〇

雜歌七首……六四
送人（詩）……六七

附錄

月花（竹醉）……七一
曉け行く空（玉骨）……七一
里の夕暮（玉骨）……七二
柳眉流水（物堂）……七二
忍ぶ艸（鷗洲）……七三
蝶の辭……七六

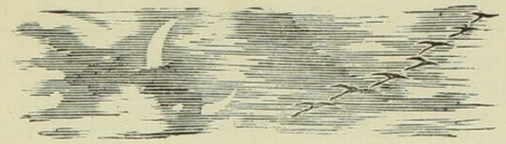
殘月

北村佳逸　著

殘る月

晴れみ晴れすみ、朦朧と
神秘の雲につゝまれて
光もにぶし、殘る月。

けがれの眼は今や閉ぢ
人は安らに眠る時



花上に淡し、　殘る月。

けがれ沈みしなかそらに
一鳥啼かず、　靜けくも
雲間縫ひ行く、　殘る月。

懷春　賦

谷の戸いでしうくひすは
春の女神の化身なり
花の間縫ふて飛ぶ見れば

梭にも似たる翼かな、

いさゝ小川の水ぬるみ
野への景色ものどかにて
けかれを知らぬ樂園に
吭も破れとうたふらし

夜もほの〳〵と曙けゆけは
岩戸を出つる旭のひかり
きこゑわげたる一聲は

むかしながらの神樂なり、

かぜも動かぬ花くもり
春の錦の濃きなかに
聲わさやかに歌うたふ
その歌ぬしは抑もやたれ、
けがれに咽ぶ世の中に
人の心をなくさむる

神の賜ひし此の使
稱ねぬ人やなからまし、
よしやうき世はうくひすの
啼音さやけくうたふ時
春にわかるゝかなしびや
落花の夢をいかで見し、
春のけしきのさながらに

變らぬものにしあらされば
流るゝ水に花いかた
やるかたなくもかなしけり

糸の縺れか、春雨の
風にさそはれ、ゆくりなく
花の杪にさゝやけば
雪とばかりに亂れける、

雨に宿かる花の下
羽根ぬらせとや、身にかゝる
香ふ雫にそぼちつゝ
春を怨める聲すなり、

寺はいつこか、鐘の音に
散りてあとなき花の枝に
復もの春を契りつゝ
ゆくへも知らずなりにけり、

花のいろ〳〵

櫻こそ花中の王ならめ、華美に咲き華美に散る、之を俠の意氣地に比べなば梅は山中に臥せる高士とは能くも譬へたるもの哉、深みどり風に櫛づる柳は露の雫を花とや見ん、桃は醜婦が七難隠さんとて白粉こて塗りに塗りたるにも増して胸悪しかり、かゝる花は穢多村の革臭さが中に咲くこそふさはしけれ、菫は秋艸の中にや入れてん、躑躅は岩角に咲きて勾配よし、梨花の淡なるは牡丹の濃なるに相對し、杜若は水に映じて色香

を増し、そよ風の波を起すなくば藤は風情に乏し、夏の夕陽漸う西に消ぬ、月影白う、木立には撒水の雫滴りて垣に時ならぬ雪かと見まがふ卯の花や星の如き夕顔の花は爭で佛臭き蓮華の及ぶ所ならむや、葉鷄頭の色は皮膚病患者と見るべく、暑くろしき日車花の太陽に面を晒して咲けるは鼻つまみなり、秋こそ艸は柔しかり、萩を先鋒として薄、女郎花、蘭、桔梗、さては露艸など、桔槔とられて水貰ふてふ朝顔は短夜の睡た眼を覺すべく、差しづめ菊は後殿の役目なり、花は冬ぞ淋しき僅に殘菊を秋の名殘に

見て早梅を春の魁に見るに止まれば木々に降り積む雪を花とや見ん、

にくや春雨

憎くや春雨、ふりつゞき、
庭に蔓(はび)こる八重むぐら、細き逕(こみち)を埋めけり
逢ふ瀬まれなる戀人の、もしも來まさば如何にせん

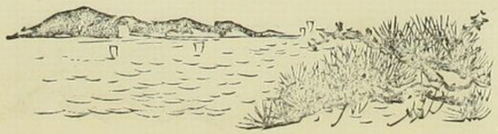
にくや春雨、つれなくも、
わが戀ふ人の通ひ路を、艸葉の露にぬらしけり

待ちわぶる夜の悲しさを、主に知らする術(すべ)もがな

戀といふものゝなかりせば、
如何に心や安からん、

嵐峽春懷

京は遺が都なればか落花を吊らふ士女も多かり、嵯峨に嵐氣深き處、堰川に烟籠むるあたり、あはれ峰に雪とまがひし櫻花の風にも堪ねで、ひら〳〵と衣に散るを拂ふも遺が情けなきわざと、春の哀れを袖に止むる今も尚ほ優



にやさしき王孫公子もわりけり、烟を洩れてきこゆる玉笛は誰がすさびそや夕されば渡月橋に月渡り、大悲閣上春悲し、咲けば散るものと知れど

須磨春懐

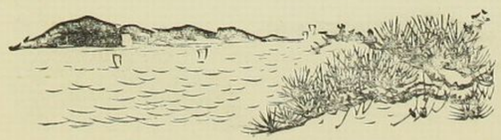
一枝を折れば一指を剪ると今も尚は墨痕あざやかに制札に殘れる武藏坊が末世にも似て風に情なき櫻花一枝、夕日を受けてきら〳〵と光る源氏の跡吊ひて行客徒らに袂を絞るめり

庭にさみしき梨一樹
春の立ちしを嬉しげに
星かとまがふ花つけて
笑めるかんばせいとやさし

花は昔の花ながら
われは昔のわれならず
犯せる罪の重ければ
獨り牢屋に閉ぢられて

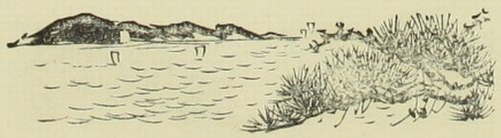
窓のひさしの隙(ひま)わらく
そゝろに吹き入る春の風
送り込みたる蝶一つ
さてもしほらし蝶々や。

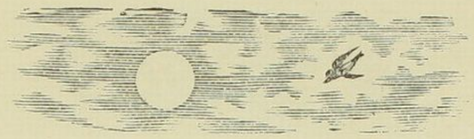
輕きつばさにひら〳〵と
すみを飛びかふその姿
罪とけかれを知らずがに
うかるゝ身こそ戀しけれ。



好からぬ人の住みかなる
牢屋なりとは知らざるか
天地は廣し、花多し
などてこゝへは來なせしか。

人の外なる人の家に
訪ふものとてはいがめしき
看守の外にあらざるを
やさしきものを見たる哉。



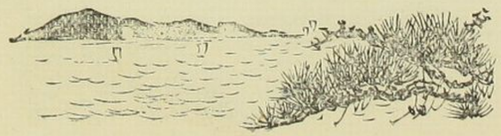


花賣り

數ある商の中にも花賣ばかり柔しきはあらじ姿こそ鄙にはあれ、荷籠の前後には錦ならぬ錦を飾り、ゆかしきかをりは色香に迷ふ蝶のこゝろを轟かす、

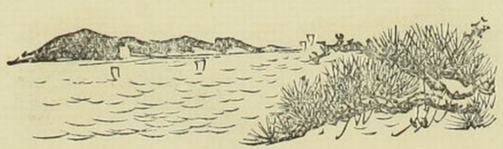
呼留むれば靜かに肩より荷を下して何花を差上げましやうといふ、

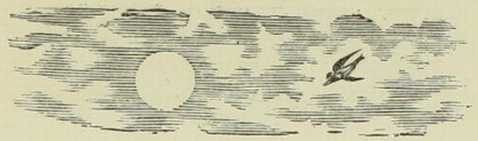
桃や櫻は今が盛り、紅いのに白いのを交せて三錢にお負け申しまする、時は過ぎたれど晩れの紅梅も御座りまする、直徑五寸といふ大輪の椿、艸ものでは金錢花に菜の花、



あの通りに咲き誇つて居りまする、

花を賣りて露の情に口を糊する賤の女を哀れと思し召し一枝の花を買ひ給はれと鋏を手にして見上ぐる少女、主人はつく〳〵と見下して御身は生香齋どのゝ嬢さまにはあらぬか、口元の黑子一點、確かに刻印に間違ひなきしるし親さまは無事か、凭く花賣りとなり給ひし由來、苦しからずば聽きたしと云ふ主人の言葉に、少女は差しうつむき、それでは貴君は我家に生花を學び給ひし方樣か耻かしき我身の上、語るも泪の種で御座りまする、





隱すといふではさら〳〵なけれど問ふて下さるな、泣かして下さるな、世には榮枯あり花に開落あり、妾の口から言はずとも此花が答へて吳れますると、差出す櫻花一枝、そが上に置けるは露か泪か、はら〳〵と散る花瓣(はなびら)は、これも盛りの過ぎてにや、

春かたみ

血を吐く胸の苦しさに
きくものうしはと丶きす
なかれに漂ふ、花一つ

暮れゆく春のかたみかも

嵐山物語

春風桃李花さきて柳は綠花は紅嵐山も久しからで錦に包まるべし

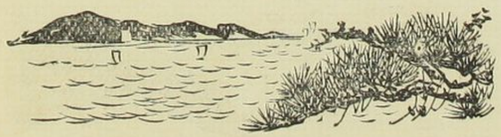
昔は嵯峨野とて訪ふ人もあらしの音便るゝのみなりしが今は花見時ともなれば新京極よりも賑はしき時もあり風景は便利と兩立せず瀧車の便開けてより風物の俗了を免れぬこそ是非なけれ醉漢の喧嘩の花を咲かすもあれば掏兒(すり)の拘引せられて花底を過ぐるもありされど

遐が幽邃の地とて風景は之か爲めにいたく損せられしとにはあらず

停車場を出づれば風雅なる茶亭あり婢の客を呼ぶ聲嬌(なま)めけり南すれば大堰川に出づ水緩うして油の如し、渡月橋之に架す橋上より望めば紅雲擾々たり綠波淙々たり

臨川寺は其名の如く水に臨み琴聞淵は其名の如く流水筑琴を奏す

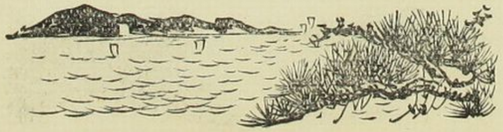
嵐山の眺めは春のみかは夏の若葉がくれに杜鵑の啼く



淺瀨に河鹿の歌ふさてはまた皐月の闇にむれ飛ぶ螢、秋の月は云ふもおろかに冬の雪を温泉に浴しつゝ玻璃窓外に看るも憎くからず

法輪寺より西する四丁にして藏王寺あり此邊櫻多し、戸無瀨の瀧より下ること二丁ばかりにして千鳥が淵に到る花の山二丁登れば大悲閣と銘せる碑あり、右には嵐峽館あり、大悲閣は山の半腹に屹然たり

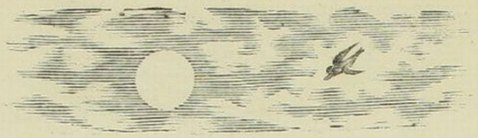
渡月橋の北を折れて西する半丁にして小督局の墳あり三軒家三友樓等此邊に散在す其西には大谷伯爵の豪華



を極めたる對嵐房あり獅子巖は東麓に在り夢窓國師の命名にかゝるとや

天龍寺は河右に在り落柿舍は俳人去來の結ひたる庵、今尚は昔の俤を存せり

二尊院の後には定家卿時雨の亭あり其西半丁に新田義貞の首塚あり這は旬當内侍義貞の首を茲に埋めたりと傳ふ此あたりに妓王妓女佛御前の古墳ありといふも艸深うしていつれをそれを知るよすがもなし瀧口入道が世を逃れたるも此あたりなるべし東に半丁ばかりにし

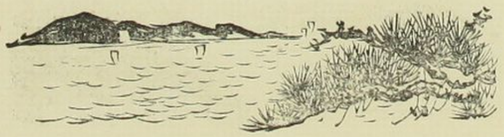


て愛宕街道に出で西北の逕を辿ること二丁後龜山天皇の御陵あり更に二丁にして化野念佛寺あり晝尚ほ暗く鬼氣人に迫る、

此邊を萬燈山と呼ぶ左に逕を取りて越畑村に到り右に折るゝ十二丁にして清瀧に到る清瀧は境幽にして世を隔て紅塵の飛ぶなく清風の來るあり橋あり渡猿と號し之に架せり

北海だより

某君足下大阪の花に已に散りたらんも北海の花は未だ



し今や鰊獵の時節にて中流の漁家は一人にて百名以上の漁夫を引率し多きは二萬石の收獵あり摘菜を北野に試み蛤を櫻島に拾ふが如き都人には此種の壯觀を知らざるべく之を語るも信せざるべし盛夏に須磨や寶塚に遊ばんより何にすれぞ暑を北海道に避けざる予は敢て君に勸むるに北海の壯遊を以てす間あらば來れ

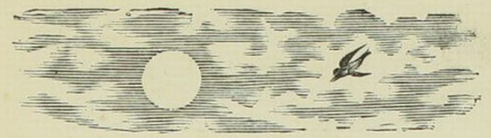
（北海道より）

君いざ歌へ
太平洋より吹きつくる、

三千里外の長風は、
浪を蹴立てゝ銀龍躍る。

一斗の正宗煽りたて、
便々たる腹火をつゝみ、
豪胸宇宙を飲まんとす。

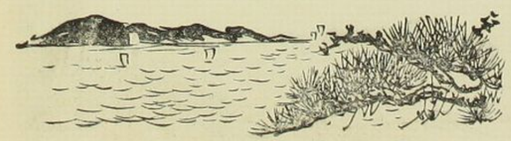
「鞭聲肅々夜渡河」
君いざ歌へ、われ舞はん。



夏の調度

延びに延びたる若葉に風そよき風鈴の音すゞしげにひゞき螢さへ二つ三つ水艸を縫ふて流るゝ頃とはなりぬをもしろきは夏のゆふべなり、

夕のすゞしさを添ふるは岐阜提燈なり椽鼻の端居に臥待ちの月かげ未だ昇らぬ時しも之に若くながめあるべき近來細工益々精を極め上八寸形金菊座房付のものに涼しけなる花艸月にむら雨など描きたるもの到る處に見受けらる、



岐阜提燈に次ぐ夕のものは行燈にて黑塗の暑くるしきより柾造りを可しとす輕便なるを主とし組立取外し自在なるものを好しとす

簾は米國輸入の水簾と稱するものあれど價貴うして俗なり青き房の流行すたれて白きを好むやうなりぬ、

婦人頭のものは金蒔繪のこつてりよりも白鼈甲、檳榔樹等夏向きに輕し金色よりも銀色のもの涼しげなり重味を減らず爲め透し彫漸く流行し始めぬ遠州形とて眞珠又は寶石を箔めたるもやさし、

近畿の夏

鴨河には細き流れに多くの人集ひにつどひて涼を貪るありさま、さりとは暑くるし、丸山公園にも雅俗群を爲し、殊に上方女の特色たる油に腐れたる頭より紛々たる臭氣いと胸わろし、京都鐵道の便を藉りて嵐峽の激湍を瞰るに厭かずば舟を僦ふて保津川を下るべし水細けれどまた興味あり温泉に浴して後酒を亞字欄頭に擧ぐるも亦可、叡山より琵琶湖を見おろす景氣も雄壯なり愛宕山に狗賓を訪ふもをかし濱寺公園の午は暑けれど夕に到

れば涼味潮と共に來り松老い砂明かなるところに立てば飛仙を挾んで傲遊するの快あるべし神戸和田岬には海水浴あり紳士の來り遊ぶ多し山陽鐵道にて須磨舞子明石など一撫でに撫でまはすを得べし到る處に球突園碁會等の設ありて消夏の客を樂ましむ寶塚有馬等の温泉に日を消せんとならば書を携ふるか碁友を伴ふにあらずば欠伸の種なり夏知らずの箕面山に瀧の下に圍ひある鯉を鱠にして麥酒を傾けなば其味將た如何に、此處病院料亭の設ありて小有馬の觀あり幽凄を樂まば高野

山の僧院に投じ三更枕を欹てゝ杜鵑沙鷄を聽くべし釣を試みんとならば茅海灣明石灣など到る處に鯊舟を賃借し得らる圍碁盆栽の如きはまた消夏の具たりといへど國民的娯樂としては餘り隱居じみて而も餘り單調なり娯樂は少くも精神の鬱陶を一掃する要素を具へざるべからずされど我國固有の娯樂は極めて不健全なるうへ寧ろ處女的なり前年催されし富士卷狩の如き其結果は失敗に終りしとはいへ兎も角も壯遊たりしに相違なかりしされば豪壯なる風景に接せんとならば浦鹽港に

遊ぶも面白く北氷洋に夢を浮ぶるも壯快なるべし

十把一束

夕月やビーヤホールに客多き

尖魚二匹暑中休暇の得物かな

電話にてむだ語りする日の長き

築港の工夫歸りて月すゞし

終列車過ぎたる跡や虫の聲

小蒸氣の月を擢きて風すゞし

夕月や美人の多き橋の上

端町に交通遮斷の暑さ哉
心中の話もありて橋すゞみ
洋人の浴衣を着たる夜店かな

あれも人の子

春とはいへど、鴨河の、西風寒く吹きすさぶ、
橋の袂にたゝずめる、まだ浦わかき乞丐あり、

道行く人の惠みをば、三すちの糸につなぎつゝ、
涙にくもる聲あげて、彈くや一曲いとさみし、

あれも人の子、あはれにも、神は乞丐に產みたるか、
外に悲しき仔細あるか、如何なる人の種ならん、

出づれは車に打ち乘りて
入れば乳姆に育まる、
これも人の子、さてもまた、
世は樣々の景色かな、

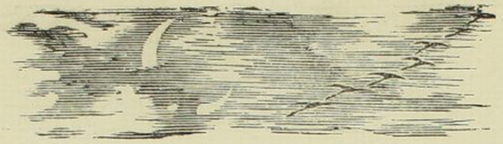
水車

流るゝ月日のとまる瀨もなく
まはる水車のやむひたなく

わが身をやしなふ　米をしらげて
骨をけつる苦も　厭はぬものを

われは無情の
みつくるまさへ

この　袖
かくては果てし、いざゝらば、
止めるかまへの心より、
止めらるゝ身の苦しさを、
われはれと偲び、此袖を、



離せ、
心は離れまし」
今日水尚寒

右手に始皇の首さげずば、
思ひは同じ秦舞陽、

時しも秋の末つかた、
座中人あり高漸離、

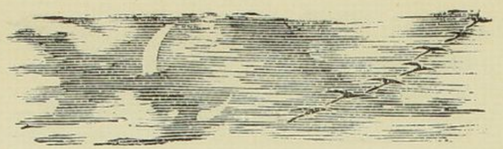
再び此河渡らしと、
兩人相見て言葉なし、

落葉をさそふ風悲し、
やかて撃ちける筑の音、

憂々として鳴る撃筑の、
ますら武夫の腸を、
身にしみ〳〵と響きつゝ、
かきむしらるゝ思ひあり、

われ今こゝに佇みて、
風瀟々として秋高く、
昔を偲びとふらへば、
易水寒し、今も尚ほ、

天地玄黄
天地混沌たる、その中に
そこに神あり
惡魔あり、



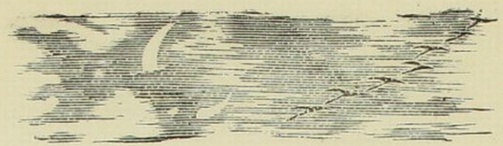
人生平和の、その中に
そこに戀あり
涙あり、
一年めくれる、その中に
そこに春あり
秋もあり、
富貴に傲れる、その中に
そこに老あり
病あり、

貧苦にやつるゝ、その中に
　そこに　和もあり
　　樂もあり、
あざなへる繩の、その中に
　そこに　吉あり
　　凶もあり、
人生自古就無死
留取丹心照汗青　（零丁洋）

比律賓の英雄アギナルドは眇たる孤島に立て籠り獨立

の幟を飜しあくまで北米聯邦の正朔を受けず烏合の衆を以て精鋭なる米國兵を驅け散らし歪みながらも國を建てしが哀れ敵の詭計に陷り今やマカナン宮の一室に拘せらるゝ身となり鮮妍たる花を鐵窓の外に眺め罪あり て配所の月を見る人生の悲酸茲に窮れりされば命を鴻毛とばかりの獨立軍も首領を失ひて氣痺に勇沮み今はこれまでと一戰に花々しき名を留めんと猛るものもなく聯鎖を絶たれし舫のごとくちり〳〵に追ひ失せけるこそあはれなれ、それに引かへ米の伯將軍は敵の大統

領を打とりたる功名にて功一級を陞され諸人より贈る
〻祝電引きも切らずとなり
偖て米國にては虜としたるアギナルドを如何にせばや
と評議をこらされしが或るものは寧ろ彼の罪を宥めこ
れを比律賓にとゞめて土人を撫でしむべしと、去れど凭
くては虎を野に放つにわらずば鷹の緒繋を解くが如け
んとて或る島に流さるべく決定ありきとなり
仁義を説くもの必らずしも仁義を守る人にあらず自由
を唱ふるもの却つて人の自由を迫害す、嗚呼、われまた何



をか云はん（ルタン所載）

皇恐灘邊説皇恐
零丁洋裏嘆零丁　（文天祥）

哨兵線

月黑うして雲の幕低く垂れ
霜白うして喇叭の音高く鳴る
夢は長城をめくりて飛ぶも
身は廣野に横はりてねむる
夜は寂寥として戰塵沈み

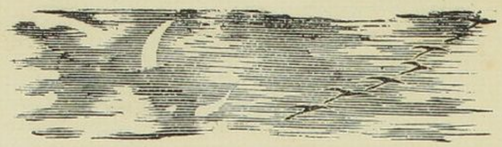
哨兵線外、人影見ざず

亡友を吊ふ

われ〳〵死にずきの泣虫の、
われは此世に殘されぬ、
〳〵色ずきの、酒ずきの、
君は彼の世に旅立ちぬ、

華美に咲きたるやま櫻、
きみが心の花と見ん、
日陰にさみしきすみれ花、
わが唄ふ詩の情と見よ、

ゆふべ嵐の一トしきり、
落花片々雪紛々、



あはれ櫻は散り果てぬ、
男らしくも散り果てぬ、

あとに殘りしすみれ花、
筐につまれて枯れ果てん、

明晨は如何なる乙女子の、
蹄にかけて躙られん、

あすは如何なる牛馬の、

呼べど返らぬ君が魂
われは悲しくおもふなり、
消えぬ思

屋外につもる雪の色、
清きは君が俤ぞ、
爐に燃ゆる榾の火の、
赤きは妾が心なり。

君が此屋を訪ふごとに、
爐の前にしみ〳〵と、
語りあひぬる言の葉に、
いつしかつのりぬ、わが戀は」。

君が姿を見ぬ時は、
あやしく胸のふさぐ哉、
これや世にいふ初戀と、
人は笑ひぬ、われを見て」。

かはり給ふな、かはらじと、
契りし時を君は早や、
忘れ給ひしつれなさよ、
道理ならぬうらみかも」。

君の姿は雪の色、
仇しの東風やとかしけむ、
妾か思ひは爐火の、
消ゆる怨みやいつならん」。

今日此頃（舊稿かきよせ）

天晴れ風また穏に美人の粲花を弄べり公園には松躍り人舞ふ樓に登れば眞帆片帆風に任せて蝶と見まがふ景色は云ふも管なり歸途青松白砂の間に月を踏んで醉脚を危く筇に支ゑたり、（濱寺公園にて）

○

春霖漸く霽れて四面皆夏なり新芽怒生し荷葉錢の如く露華珠の如し杜鵑を聽かんとならば比叡愛宕の諸峰、水鷄を聽かんとならば鴨河糺森のあたり、藤は今や盛りにして螢は未だし、輕衣短筇行くに易く、雨後輕暖にして歩むに適せり

○

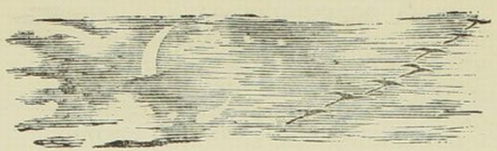
水には汐干狩釣魚の遊びあり野には菜の花摘艸の興あり先頃花見汐干の混雜を避けて紀伊の山里に遊びしに

里人らが柴に蕨をかけて歸るに遇ひたれは早や蕨時なりやと問ふにさなりと答へぬ乃ち山をあさりて一把を得たり紀泉の山は今こそ盛りならめ莫顆躑躅は山を燒かんばかりに開けるを見き

○

牡丹は岩戸鏡七寶殿白黄獅子黑龍錦など今盛りに開き玉松鶴は尙ほ未だし嵐山及び宇治の新綠は厭かぬ眺めあり

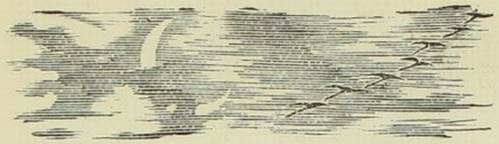
○



去る十日の日曜は梅見の安息日を雨に流されたるこそ返へす〳〵口惜しかりしか一雨ごとに春らしう艸も萠ゑ立ち柳も招く城南城東の細逕には鳥打帽子や紫紺張の洋傘相次ぎ花を賞し芹を摘むを見うけぬ桃山の桃は未だ開かずとも味原の池は水すでに温かに尻無の川堤に柳楮の新芽稍催し小魚已に鉤に上る

○

櫻は散れと藤は方に開けり柳は落花を拂ひ燕は春風に飄る春遊の樂み今を措いて將た何れの日ぞ家族連れの



摘艸は靄々たる心の春を見るべし

○

端町には蚊の聲糸の如く蛙の鳴音は未だ耳新しければさして喧しからず菖蒲杜若は今を盛りと藤の紫を奪ひて咲けり江州街道の村舍に宿からば夜更けて杜鵑の聲を聽かるべしとなり

○

陽氣愈々旺んにして途行く時には袷の素肌か左なくば單衣なり午時には絽の羽織を羽織りたる人も見受く

都會には孰れも免れぬ埃は立ちぬ生温かき風に煽られて窓に吹き入る心うさ

肉のすき焼も暑くろしうなりて鮎の淡泊を下物として盃中の物を傾くる快さ、精進料理も夏向き甚だ佳なり冷したる麥酒はた捨てかたし、

○

あな堪へがたと唧つ午の暑さも夕日と共に西へ消えて夕されば風自ら庭に湧き涼味座に湍つ、晨に起きて公園を歩めば垂柳風に靡きて露衣を霑し、宵に月を踏みて橋

上に立ては烟火空に開きて流螢懷に入る、心早き秋艸は咲き初め夏菊はた盛りなり俗にはあれど祭り月とて常には無沙汰勝の親類など打ち集ひ酒斟みかはすも面白かり、

○

寧樂公園の綠樹方に盛んに神鹿靜に眠れり、舊き都もこゝに趣を變へ、猿澤池頭に紅燈綠酒の豪遊を極むるものもあれど幸に雅味を損ふに到らで公子の微醉淺酌せるなれば佳人の絃歌低唱するあり、淺茅ヶ原露繁くして三

笠山頭新月淸し、

○

八幡太郎の咏によりて名を知られたる勿來關は太平洋を前にし砂山を背にし左には小名濱を抱へ右に平潟灣を控き風光絕佳なり海水浴の設備あれど人の來りて遊ぶもの罕に瀟洒たる小仙寰を形つくれり

○

降り續きし霖の霽れてよりめつきり暑さを感ずるに到りぬ此時に恐るべきは流行病なり雨後濕氣未だ乾かざ

る時俄に高度の熱に逢へば熱性病の流行を招く感冒の如きは最も注意して之を避けざるべからず

冬は熱性の病に罹るも養生し易けれど夏は暑氣甚しきが故に身体緩漫となり從うて衛生に怠り病氣に遇ひ易し

赤痢虎列拉は多く水より來るものなれば煮ざるものは成るべく之を避くべし不熟の果實は恐るべき病を惹き起すものなり勞働に服せざるものは不消化物を避け暴飲暴食は最も謹まざるべからず

此の如きは皆人の知る所なれど知つて謹まざるは人性の弱點なり暑氣に苦む時は精神を靜にし智慮を過度に使ふなく身体を輕躁ならしむるなくば腦病の襲來を防ぐの効あるべし

○

簞笥の底の古袷取出して重ね着もせまほしかりし二三日の冷氣には雲行き早き空の景色と共に何となく秋めきしが又ぞろ逆に戻りたる此の暑さ昨日は淋しかりし氷店も再び盛りかへして景色づき橋の上の夕間暮に團

扇つかひの姿など全く土用中の景色を現しつゝされど立秋の節も過ぎしことなれば朝夕はしかすかに秋の遠からざる心地すめり撒水したる庭の草間に鳴き出つる虫の音と艸の葉末におきそふる露の色とのみは秋の價をしめしぬ、

○

六月といへば夏なれど朝夕さへ冷を感せぬに禽鳥飛類は早や氣の先をや得て秋は虫籠の中より立ちそめぬ、松虫鈴虫轡虫蟋蟀邯鄲鉦敲大和鈴觀音蜂松風焔魔など

平仄の合はぬ名多し螢は石山産を第一とし鴨河、宇治、中津等之に次ぐ、河鹿は保津産最も珍重せられて鴨河産之に次ぐ、昨年園ひの聲好きものに價も貴し、菓物も枇杷を先驅として梨子夏蜜柑西洋楔子など八百屋の店頭に堆し

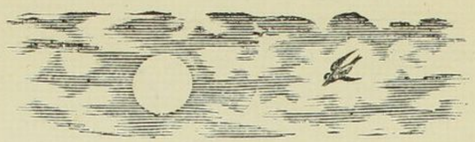
逢ふ人ごとに時節柄に拘らず暑くるしい話ばかり、主人不在の旨を下女に啣めて床を綠樹の蔭に移し徐ろに葉捲莨をくゆらせば頭上にふりかゝる蟬時雨

○

浪花橋より見眺せば數千の通ひ船、舷頭に燈を揚げ蒼波の中を縫ひ行くさま流螢の風に亂るゝにも增して例の如く壯觀なり

○

臺所にはこれより菜の心配なく青物は今や出盛りなり今年は菓物の中り年とて檎枯、李、杏、夏蜜柑、天津桃、和蘭覆盆子など共に大出來なり關西にては餘り賞美せねど臺灣產の芭蕉の實至極出來よし、西瓜は店に出てはあれど未だ本當の味を保たぬよしなり南瓜も其醜貌を店に晒



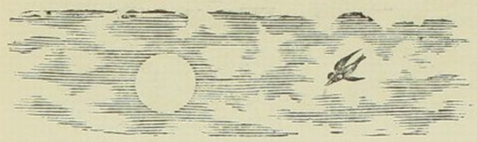
し始めたり併し下女の口に入るは茲十日の後なるべし甲州產の蒲桃小氣味よきばかりの出來なり

○

雨過ぎし庭に夕日の影漸く消ぬれば風に聲ある松の杪に十日過きの月を宿し軒に吊せる籠の中には鈴虫の頻りに鳴き出づるもをかしや、

○

夜に入れば大月東山より輾り出で光を鴨河に灑ぐ、後に山あり前に水あり酒は壺に溢れ肴は盤に堆し、加茂河上

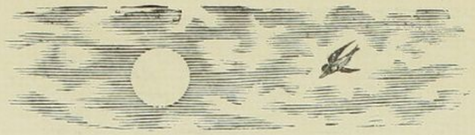


の月影、玻璃窓外の積雪、兩つながら見て厭くを知らず、日ひとひ夜ひと夜、興盡きずして俗務已に身に迫るを如何せん

○

いづくの精舍より撞き出せし、いん〳〵たる鐘の音、霜繁き甍を辷りて比叡颪庭の小笹に音づれ殊に長き夜の眠り就らざる時など世に強ねたるものならでは東郊の陰凄に堪ゑ得べからず

擊鼓



擊鼓其鏜　踴躍用レ兵
土レ國城レ漕　我獨南行一
從二孫子仲一　平二陳與一レ宋
不二我以歸一　憂心有レ忡一
爰居爰處　爰喪二其馬一
于以求レ之　于二林之下一一
死生契濶　與レ子成レ說
執二子之手一　與レ子偕老一
于嗟濶兮　不二我活一兮
于嗟洵兮　不二我信一兮一

（詩經國風）

つゝみの音のとう〳〵と
響はすでし死出の旅
つかれし上に疲れとや
南！鄭國、途遠し」

孫將軍にしたがひて
みち遙々と征きしかど
歸らん時は何の日ぞ
君にさゝげし身とは云へ」

浦わけ衣、袖寒く
宿る家なし山の麓
うまやの馬や放れけん
いなゝく聲あり森の蔭」

深き契りは沫水の
はとりに立てる我家庭に
留め置きてし紅梅の
春のかへりを待ちぬらん」

かくなるからは逢ふことも
かなふまじとは知りながら
さてしもあらで、もの戀ふる
心の中こそ悲しけれ

○

朝またき神の御前にぬかつけば
袖にまつふく年の初風

○

こすゑには吹ともわかぬ春風に
花散うかぶ池のおもかな

○

しつの女がなか〳〵し日を一筋に
糸くる道につとめけるかな

○

去年植ゑし艸のいろ〳〵さみたれに
いふせきはかり茂りけるかな

○

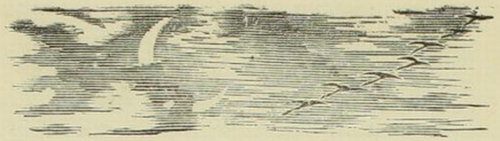
秋もやゝ末野の庵の一つやは
袖にも露の餘りぬるかな

○

木枯のさそひのこしゝ紅葉に
うすくもかゝるけさのはつ雪

○

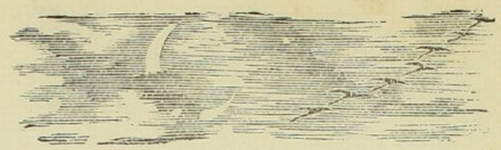
やまひとのおふしたてたる姫小松
ひきゝて千代の友となさばや



送二王箕園歸一レ清

書劒飄然留不レ留　酒力難レ消壯士憂
埠頭西望海如レ油　雲烟何處是蘇州
惜レ別共登賣酒樓　酒樓有レ女賣嬌柔
蛾樣雙眉星樣眸　手楔二鳴琴一口含レ羞
俚曲上レ弦爲レ君謳　一舒一急操二離愁一
擧レ坐相見暗淚浮　海氣襲レ人慘レ於レ秋
思君報國志未レ酬　忍レ見獅鷲逞二侵牟一
富貴豈望萬戸侯　慷慨要レ報九世讎

門下養得管樂儔　胸中曾畫子房籌
短衣長鋏試二東遊一　一屯一蹇同二楚囚一
鼎折レ足兮命謀レ仇　鳴鶴在レ陰群雀咻
挽二回狂瀾一完二金甌一　此外赤心無レ所レ求
四眼接レ睫淚空流　海風吹レ潮潮聲悠
進潮退汐搖不レ休　壯士胸中湧二謀猷一
鴻爪有レ期不　資斧愼レ所レ由　口說與二心謀一
刺刺問不レ休一　四百餘州尋二戈矛一
四億萬人皆沐猴　絳衣大冠擬二倡優一



朝進二一李一夕一牛一　翹翹錯薪拔二其尤一
王命論成在二班彪一　十目所レ見張與レ劉
肉食之輩無二離婁一　桑麻枯盡化二荒疇一
神禹所レ治陸噴レ漚　國無二君臣一渡無レ舟
神州陸沈何人修一　扼レ腕指觸大刀頭
舞妓灣外記二曾遊一　離合集散一舟舟
酒痕留在狐白裘一　一觴一咏賦二沙鷗一
屈レ指一年夢中周　今日風光依レ舊幽
黃昏海上月如レ鉤　海月如レ鉤無レ由レ鉤

火輪船繫舊沙州

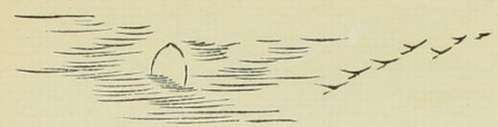
以上は予が一年間に於ける作文中、政治宗教經濟に關係あるものを除き其餘を纂輯したるなり、そが中に大阪日々新聞、大阪新聞、文學評論、小文學等に掲載したるもあれど多くは未だ世に公にせざりしものに係る以下に掲載するはわが友人の文藻なり

附錄

花

月

清きすかたの乙女をば
花とは誰かよびそめし
理想の夢に咲く花を
さらば月とはなづけまし
さやかに光る秋の魂
罪と穢れを知らざれば
やがて三五の齢まで
心の花や満ちぬらむ　（竹蔭）



曉け行く空
常闇なりにし夜は明け行き、
さらばと天人幕を曳けば、
霞の中なる星眼たゝき、
いよゝ曉け行く御空の雲、
燃ゆる乙女子の胸の中の、
希望の光に變はらばこそ、（玉骨）

里の夕暮
樂しかりにし今日も暮れ

赤き心を表はせる
夕雲空にたなびきて
子守のせなに眠る兒の
薔薇にも似たる顏はせを
窺かふ空の星二ッ三ッ（玉骨）

柳眉流水

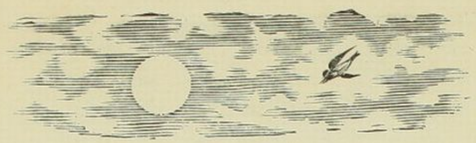
岩間もり又木の根ぬひ。淵となり又瀨となりて。
汝を見初めし一瞬時。別れて去るぞ悲しかる。
汝に心のあるならば。情無しとこそ恨むらめ』

凍ゆる雪も厭はずて。　栁楡ふ風も顧みず。
君に逢ふ瀬は束の間に。　獨り留る身となりぬ。
君に情の若しあらば。　未練とばしは云ひなせそ。

（拗堂）

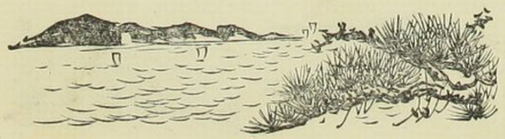
忍ぶ草

悄として埠頭に立ち盡せば烟は黑き幕を擴げて天地を其掌中につゝみぬ、天言はず地言はず、人亦默す、打よする浦波何の思ふ所やある、片月雲を破りて復た雲に呑まるいざ言問はん此の水は去年の水なりや、あらずや、わが戀



人は浮世の累を逃れてその清き身を汝に托しつ、如何に彼女は其無垢なる魂を那邊に投せるいざ語れ、われ聞かん、そも戀はくせもの、汝惑の淵瀬に陷り八千歳を契るて ふ大椿の壽命を、あたら一夜の嵐に散らし、わはれ鯨鯢の吼るあたり獵虎の跳るところ、荒き波路に軀を漂はせつらん、あはれ、波は永く滿干し、月は長なへに盈虛するも、われと御身との交は空しく幽冥の間に背きて、想思の念を打語はん便も絶ゑ、孰かは哀れとや思ふべき、

（鷗洲）



蝶の辭

忙はしきは艶陽三春の花候櫻よ桃よと都人を騒がせ花を追ひ香にうかるゝとは云へ常にめうとの共かせぎ互に手に手を飛まわりひとが見て花際徘徊す双蛺蝶と妬かば妬け菜の葉にとまれなどなぶらばなぶれおもしろおかしも悲しやしばし夢の間の九十の春光を命とし入相の鐘に南無阿彌陀佛とちる花に身は梓弓年老いて杜鵑一聲人は初音ゆかしと云ふめれど吾は血に啼く思ひして五月雨の下夏木立の陰青帝に殉する悲しさわはれ

察してたもと聲を惜まず泣きにける　（五位天爵）

殘月　終

明治三十五年五月二十日印刷
明治三十五年五月二十五日發行

定價金貳拾錢

月ん さ

著作者　北村佳逸
大阪市東區北久太郎町四丁目百廿八番邸

發行者　岡本仙助
大阪市西區靱上一番町六十番邸

印刷者　矢野松吉
大阪製本印刷株式會社代表者

復製不許

發行所　岡本偉業館
大阪市東區北久太郎町四丁目
電話(特)東二二八七番

發賣所　中澤明盛堂
京都高倉竹屋町

發賣所　大塚大洋堂
東京日本橋區今川橋角